
『幻想郷見聞録』

よこたて十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『幻想郷見聞録』

【Nコード】

N6559U

【作者名】

よこたて十

【あらすじ】

この世界のあるところには結界により人間世界から切り離された森は『幻想郷』と呼ばれていました。『幻想郷』は怪異や妖怪がたくさん住みつく物騒なところではあるけれど、今は平和なところです。そんな『幻想郷』に住む少女たちの小さな日常とドラマ。◇◆
本作品は短編集となっております。※百合要素有り

近くて遠い、夢のあと（前書き）

レミリアとフラン＋咲夜

近くて遠い、夢のあと

無垢な寝顔を見て思う。わたしはなんてことをしていたのだろう、と。

四百年以上もの間、時間が止まったままであった少女は何も知らない。花の美しさも、星のきらめきも、月の金色も、生命の重みも。純粹無垢な破壊者は、まだ何も知らないから。壊すことでしか、ものを扱うことを知らないから。

実の妹なのに、触れることすらままならない。その金髪を撫でてあげたことすらない。

わたしはこの『妹』という存在が、まだ、怖い。

外に出せば、無慈悲な破壊者に成り果てる、『妹』の姿が思い描かれるようで、怖い。

無数の引っかき傷のある壁を撫でる。

深く食い込んだ爪の跡を見ていると、『妹』の悲痛な声なき叫びが耳の奥に響いてくるようだった。ずっとわたしが耳をふさいできたその叫びは、今までわたしの頭の奥を揺さぶり、冷たい心臓に爪を立てていた。

今でこそ、「お姉さま、お姉さま」と親しげに呼んでくれているけれど、きつと『妹』はわたしを恨んでいる。

それがわかっていいるから、わたしはまだ『妹』に謝ることができない。

ボロボロに破かれたぬいぐるみの切れ端が、部屋の隅に埃と一緒に固まっていた。

「……お嬢様」

いつの間にかそこにいた咲夜の静かな声が、広い部屋に響いた。その手に持った蠟燭が、咲夜の白い顔をぼんやりと照らしている。

「妹様は眠っておられるんですね」

「ええ、遊び疲れたみたいですやすやす眠っているわ」

フランは、骨組みだけは上質な地下にあるこのベッドが好きだった。妖精メイドが毎日シーツを取り替えてくれるけれど、フランが使うとすぐにぐしゃぐしゃになってしまう。

本当に気持よさそうな寝顔だった。しかし、その頭を抱きしめるだけの勇気が、わたしにはまだ、ない。

「悲しそうな顔をしていらっしやいます。何かあったのですか、お嬢様」

「そうね……」

わたしは、目を伏せた。

「わたしがフランにした仕打ちは、間違っていたのかしら」

「わたしには、わかりません。……しかし、お嬢様」

咲夜がわたしの方へ視線を向ける。

「妹様はお嬢様を、きつと恨んではおりません」

咲夜のその言葉に、わたしは驚いて顔を上げる。

「どうしてそう言い切れるの？」

咲夜はゆっくりとフランの方へ視線を戻した。

「はつきりとは言葉にできませんが、今の妹様がお嬢様へ劣情を抱いているとは思えません」

「……でも、そんなこと、この子の言葉を聞かないとわからないでしょう？」

無垢な表情で眠っている『妹』に、わたしはひどい仕打ちをした。だから恨まれて当然なのだ。許されなくて、当然だ。

フランがシーツを握りしめて、寝返りをうつ。

めくれたブランケットを咲夜がそっと、フランの身体にかけた。

「お嬢様は、どうしたいのですか？」

振り返った咲夜が、わたしの顔を見て、そう問いかける。

「どうしたい、って……」

言葉に詰まった。

わたしは、フランに『謝りたい』

しかし、謝ってどうするのか。

「許されたいのですか」

咲夜の瞳が、蠟燭の炎をはねかえし青白く光っている。

咲夜はいつでも瀟洒で余裕と優雅さを持った順従なメイドだが、稀に彼女は主であるわたしの方へ深く踏み込んでくることがある。

わたしは、その行動はきっと咲夜の賢さからくるものだろうと思っている。

「……そうかもしれないわね」

要は、エゴイズムなのだ。

フランの気持ちよりも、そんなことをしてしまった自分をフランの言葉によって『許される』ことの方が大事なのだ。

わたしは何百年も生きてきたというのに、どうして、そんなことしかできないのか。わたしは、自分の愚かさに呆れ、絶望した。

ふと、わたしを見ていた咲夜がにこりと微笑んだ。

「妹様を撫でてあげてください。そうすれば、きっと妹様は喜びます」

咲夜の指がわたしの手を包む。

そして、その指をフランの方へ伸ばした。

けれども、その白い頬に置かれる寸前で、わたしは弾かれたように引っ込めてしまった。

「……できないわ」

「どうしてですか？」

わたしは、目を伏せた。

「だって、この子に触れられるほど、わたしの手は綺麗じゃないから」

咲夜はわたしの顔を見て、そっと笑う。

「そんなことはありません。お嬢様の手は小さくても力強い、優しい手をしています」

咲夜のほんのり温かい手のひらが、わたしの冷たい手を撫でた。確かに、傷ひとつない、あまりに綺麗な手だ。

「妹様は、人間たち……博麗霊夢や霧雨魔理沙と出会ったことで、たくさんを知りました。だから今は、ただの妖怪なのです。破壊しつくすだけの、狂気のかたまりではなくなったのです」

咲夜の言葉は静かなものだった。

その手にある燭台の蝋燭は、かなり小さくなっていた。

咲夜は、フランの頭を撫でる。優しく丁寧な、手のひらだった。

「だからお嬢様、撫でてあげてくださいまし」

咲夜がわたしに笑いかける。

わたしは手を伸ばした。

指を伸ばし、心の底にある恐怖を振り払い、手を伸ばす。

フランの髪に触れる。

手入れをしていなくて少しからまっているけれど、癖毛気味の柔

らかい髪の毛だった。

フランが少し、身じろぎをした。

わたしは驚いて、手を退ける。

「おねえちゃん……」

フランが、小さな声で呟いた。

寝言のようだった。

フランの表情が少しくずれて、言葉が続く。

「……好き」

咲夜が優しく微笑んだ。

わたしの目には苦手なはずの少ししよっぱい水が、浮かんでいた。

近くて遠い、夢のあと（後書き）

これがいわゆるきれいなレミリア
でもどっちかというところのレミリアのほうが好きです

無垢な妹を暗い地下室に幽閉していたレミィの方がフランちゃん
より狂気だと思っに一票。

でも個人的にはお姉ちゃんをペロペロしたいフランちゃんのほう
が好きです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6559u/>

『幻想郷見聞録』

2011年11月16日02時57分発行